



Title	郁達夫と旧制高校――その文学の生成
Author(s)	宋, 新亜
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92231
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (宋 新 亜)	
論文題名	郁達夫と旧制高校 ——その文学の生成
論文内容の要旨 中国近代作家の郁達夫（1896—1945）は1913年に長兄の郁華（1884—1939）とともに来日した。神田正則学校での受験勉強を経て、1914年7月に東京第一高等学校特設予科の入学試験に合格し、官費留学生として第一高等学校に進学した。一年の予科教育が終わってから、郁達夫は1915年に名古屋の第八高等学校第三部（医科）に配属されたが、一年後に第一部（法・文）に転ずる。1919年10月に東京帝国大学経済学部に入學し、1922年に無事に卒業試験に合格し、学士学位を取得した。本研究は郁達夫の旧制高校での留学経験に注目し、その経験が郁達夫の文学活動に与えた影響を究明したものである。 第一章では、郁達夫や同時代の知識人の回想録を用い、郁達夫の留学時代を概観した。郁や彼と同期に第一高等学校に進学した、のちに文学団体の創造社の同人として中国文壇に登場した郭沫若、張資平が書いた学生時代を追憶した回想録からは、いくつかの共通の留学体験が読み取れる。第一に、知の構造の変化である。清末民初期の中国では、近代的教育制度が未だ整備されていなかった時期である。この時期に書塾や教会学校、新式学堂、専門学校など教育機関で教育を受けた彼らがのちに書いた回想録から、当時の教育に対する不満と、満たされない知識欲という特徴を読み取ることができる。その一方、旧制高校での留學生活に対する回想には、大量の書物の閲読、近代的な知識への接触に溢れている。こうした共通の学習体験の背後にあるのは、彼らが共通に体験した知の構造の変化であった。中国から日本への移動、そして伝統的な教育から大正教養主義を中核としたエリート教育への転換によって、郁達夫らは従来と異なる視点を獲得でき、慣れ親しんだ生活環境を他者化し、より広い視野から自分、または中国の世界における位置を再発見することが可能となった。第二に、受験のための苦学である。郁達夫らは官費留学生の資格を取得するため、毎日長い時間をかけ、補習をうけたり、受験勉強をしたりしていた。このような苦学は決して留学生の間に限られない。数多くの先行研究および受験雑誌の記事が示したように、受験のための苦学体験は、郁ら同時代の日本人学生にも共通している。この意味で、受験のための苦学は旧制高校生としての共通の感情的な記憶といえよう。第三に、身体的記憶としての神経衰弱である。郁達夫と郭沫若の回想録が示したように、彼らは旧制高校時代に神経衰弱に罹ったことがあり、その後長い間、頻繁に発症している。その一方、受験競争が厳しくなっていく大正期の日本社会において、神経衰弱に罹った受験生が急速に増えており、神経衰弱は数多くの受験生の共通の体験となった。だが、郁達夫の文学活動が示したように、神経衰弱は単なる郁自身が罹った疾病というだけではなく、彼の創作活動において借用できる資源でもあった。文壇の有名作家となった初期創造社同人はすべてが期せずして、回想録においてそれぞれ知の構造の変化の体験や、受験のための苦学、神経衰弱を語っているのは、旧制高校での留學経験が感情的・身体的記憶を通じ、彼らの心の中に深く刻まれていることの証左であろう。 日本留學生活が終わった郁達夫らはどのように1920年代の中国文壇に登場したのか。第二章では、郁達夫らが文壇に登場した当初に巻き起こした翻訳をめぐる議論を切り口として、この問題を考察した。当時の中国文壇では、翻訳の基準が未だに定着しておらず、翻訳者の不十分な外国語能力により、誤訳などの問題が多発していた。旧制高校で厳格な外国語教育を受けた郁達夫ら初期創造社同人は当時の翻訳界への不満を明確に表明し、実際に訳文を取り上げ、原文と対照しながら、その誤訳を指摘していた。それらを分析することで、郁達夫らが重視していたのは、訳文の正しさと訳し方の適切さという二点の特徴が浮上してくる。要するに、彼らは外国語に対する極めて高い理解力を求めているのである。このような翻訳に対するこれほどまでに厳格な態度の背後には、彼らの旧制高校での外国語教育の経験と深い繋がりがあった。旧制高校のカリキュラム全体の50%以上を占めていた外国語教育は、文学作品の外国語原書を用いて行われていた。原文に忠実に訳すことによって外国語を学ぶという外国語の教授法は、郁達夫の外国語能力を培い、外国語文学に親しむことや、また何よりも正確な翻訳を重視する姿勢を身につけさせ、彼の翻訳に関する考えの土台を築いてきたのである。	

また、第二章では、日本各地にあった旧制高校の校友会の間で行われていた『校友会雑誌』の寄贈行為を考察することで、旧制高校、旧制中等学校、高等師範学校を中心とし、実業教育界をもカバーしていた教養共同体の範囲を描き出すことを試みた。この共同体の中心部にあった各地の旧制高校生は、「寄贈—読む」という形式によって、互いに認識や思考を共有することができたと思われる。このような共同体が存在したからこそ、初期創造社メンバーの間には、翻訳に関する考えや文学上の趣味などを共有することが容易であった。こうしたレンズで、上述の1920年代に創造社が繰り広げた翻訳に関する議論を捉え直すと、彼らが自らの長所を生かして文壇での地位を得るために争いを仕掛けた、というよりも、旧制高校での外国語教育の共通経験の作用によって、いわば無意識のうちに彼らの内側から翻訳批判が噴出したのであろう。

日本では、激しい受験競争を経て旧制高校への進学を勝ち取ることは、エリートとしての未来が保証されていることを意味していたが、同時代の中国においては決してそうではない。第三章では、郁達夫が自らの最初の就職経験を基に創作した小説の「茫茫夜」を取り上げ、旧制高校と密接に結びついたエリート主義と立身出世主義言説の力が同時代の中国で無効となった時、郁達夫の旧制高校での留学経験の意味を探究した。「茫茫夜」は1922年発表されてから、小説に書かれた主人公の于質夫と友人の呉遲生との親密な交友関係が同性愛的関係であると読み取られたため、読者から批判を浴びていた。1920年代の中国での同性愛に関する言説には二つの傾向が見られる。一つは異性愛中心と民族国家を統合した視点から、同性愛関係を変態性欲と見なす批判であった。その矛先は「異性への嫌悪感」や「夫婦関係の阻害」、「個人の幸福の阻害」、「人種の連続性の危機」という四点に集中していた。もう一つは純粋な精神的愛であると称揚する言論である。いずれにせよ、「茫茫夜」に書かれた二人の親密な交友関係は精神的なコミュニケーションを重んじているものの、その親密な関係は、民族国家建設が社会言説の主流を占めていた1920年代の中国においては、民族国家の建設と発展の阻害と見なされたことが容易に想像できる。

ところで、「茫茫夜」を深く読めば、読者が読み取った「同性愛関係」は物語内部の時間軸の「過去」にしか現れないという特徴が見逃すことはできない。しかも、「呉遲生の物語」は主人公の于質夫の精神的不安や動揺、または日常生活の安定性が揺らいでいるときにしか現れていない。反対に、主人公が現実で感じた不安が解消されると、呉遲生の物語は于質夫の回想から徐々に消え去ってゆく。つまり、「呉遲生の物語」はある意味で主人公の緊張状態の調和手段として存在しているのである。于質夫と呉遲生との親密な関係は、大正期日本の旧制高校生のあいだの交友関係のありかたからみれば、決して珍しいものではない。同じく旧制高校の卒業生である矢内原忠雄が第一高等学校時代に書いた日記から、「茫茫夜」に書かれた同性間の親密な交友関係は、矢内原と先輩の河合栄治郎との交友関係にも存在したことが分かった。「大高同学の系統」で9年間の留学生生活を過ごした郁達夫、または日本留学経験がある于質夫にとって、その親密な関係は極めて身近のものである。そこから、二人の親密な関係の背後にある旧制高校の影が見えるのではないだろうか。また、同じく「于質夫シリーズ」と思われる小説「風鈴」を補助線とすると、その回想にしか現れない同性間の親密な関係がもたらした緊張状態を調和する役割がより明確に読み取れる。郁達夫が「茫茫夜」を執筆していた1921年はちょうど安慶が学生運動と軍閥闘争で混乱していた時期である。郁達夫は現実世界に感じた不安をそのまま小説のなかに再現した。1927年、すでに文壇の有名作家となっていた郁達夫は、「茫茫夜」を自作集に収録する際に、于質夫の学生時代は「日本留学時代」から、ただの「修学時代」へと書き換えられた。その修正行為から読み取れるのは、郁達夫が新人作家から有名作家へ変わっていくプロセスのなかで、将来への不安がある程度解消されたとともに、調和手段としての旧制高校での留学経験は記憶のなかで薄くなって行ったためであろう。

第四章では、郁達夫の代表作「沈淪」を取り上げ、旧制高校での留学経験が郁に与えた近代に対する思考の枠組みを考察した。1923年、郁達夫は張聞天に宛てた手紙の中で、「大衆を改造する」意欲があることを表明している。郁と同じく教養共同体の構成員である倉田百三（1891—1943）を補助線としてみれば、郁達夫が共有した苦悶の根源にあるのは、近代以来の知識と情意との分離状態によって生じた有機的な生命体の分離である。すなわち周作人（1885—1967）が語った「近代人の苦悶」である。第四章で考察したように、郁達夫は「沈淪」において、単なる「苦悶」を吐き出そうとしたのではない。郁は意識的に「同情」という概念を使い、近代以来の生命の主客分離状態によって生じた苦悶を超克し、主客合一という生命の原始状態に復帰しようと試みたのである。また、郁達夫ら初期創造社同人が愛用した「Sentimental」という表現は、当時の文壇で感傷主義の提唱と批判されたが、第四章で考察したように、「Sentimental」という表現は決して「感傷主義」と訳せないものである。その背後にあるのは、資本主義近代化以来の科学万能主義によって抑圧された日常生活への感受性を再構築する試みである。郁達夫は「沈淪」で書かれた苦悶や、同情、「sentimental」を通じ、近代科学万能主義によって抑圧された感情の主体を喚起した。そしてその上で、近代人の苦悶の根源にある主客分離の状態を修復し、生命の原始状態に復帰する試みを、青年たちに提供している。これこそ、郁達夫が語った「沈淪イズム」の実体ではないだろうか。「沈淪イズ

ム」の射程において、郁達夫が求めている理想的な大衆像、または未来の国民像は、理性と感情が合一できる状態であることが読み取れる。また、第四章で提示したように、郁達夫が大正教養主義の中心地である旧制高校で得た思想資源こそ、「近代人の苦悶」を解剖し、超克する道具であったのだ。

本研究は以上の4章に分けて、郁達夫にとっての旧制高校での留学経験の意味を考察した。その意味とは一言でいえば、多層的な視点の獲得である。このような多層的な視点があるからこそ、郁達夫はより広い視野から文学活動を展開することが可能となったのであった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （ 宋 新 亜 ）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	今泉 秀人
	副 査	教授	五之治 昌比呂
	副 査	教授	林 初梅
	副 査	准教授	劉 文兵
	副 査	関西学院大学教授	大東 和重

論文審査の結果の要旨

「郁達夫と旧制高校——その文学の生成」と題する本論文は、中国近代文学を代表する作家のひとりである郁達夫(1896-1945)のおよそ八年におよぶ日本留学、その中でも特に1914年からの東京第一高等学校特設予科、そして第八高等学校における都合五年間のいわゆる旧制高校時期に焦点を当て、彼のこの留学期の経験がその後の作家としての郁達夫の創作や思想にどのような影響を与えたかを論じたものである。

第一章「郁達夫とその留学時代」では、留学生としての郁達夫の経験を、主として日本における中国人留学生の留学制度の変遷や、当時の日本が学歴社会に移行していく中で受験が青年に及ぼした影響をもとに、大正期の中国人留学生の精神形成を、大正教養主義を中核としたエリート教育への転換という観点から論じている。

第二章「初期創造社の翻訳観の誕生」では、日本で創造社という旧制高校留学生による中国人留学生の文学団体を結成した郁達夫らが帰国後1920年代の中国文壇に登場した際に既成文壇に対して行った批判を、翻訳に関する意識や態度を軸に論じた。創造社同人の主張の根本的な理由として、創造社同人に共通する旧制高校で受けた厳格な外国語翻訳の教育による独特の翻訳観の存在を指摘した。また、日本社会における校友会雑誌の寄贈行為から旧制高校を中心とした広範囲の教養共同体の存在を描き出し、これを創造社成員間の紐帯意識と結びつけている。

第三章では、日本における旧制高校卒業者のエリートとしての意識を持つ留学生が帰国した時、立身出世の道が見えない現実との間にある種の喪失感が生じることについて、郁達夫の創作「茫々夜」を分析することによってあとづけて論じている。作中の主人公と友人との関係が同性愛とみなされ批判を受けたことの背景として、この作品が発表された当時の中国の同性愛に関する言説を整理し、民族国家建設が社会言説の主流を占めていた1920年代の中国においては、同性愛が国家の建設と発展の阻害と見なされていたことを提示した。さらに、作中の「同性愛関係」が物語内時間の過去にしか現れず、主人公の不安や動揺による緊張状態の調和手段として存在していることを見出し、彼らの親密な関係は、大正期日本の旧制高校生のあいだの交友関係のありかたからみれば決して珍しいものではなかったことを指摘した。ここから、この作品と郁達夫の当時の社会経験や精神状態との密接なつながりを論じた。

第四章「『沈淪イズム』とは何か」では、郁達夫の代表作「沈淪」を取り上げ、この作品の執筆意図を、旧制高校での留学経験が郁に与えた近代に対する思考の枠組みを考察することによって明らかにした。「沈淪」に描かれた主人公の苦悶を、大正教養主義を代表する作家倉田百三、その思想的背景として、西田幾多郎の「生命主義」に依拠した知と情意との分離によって生じる煩悶と対比し、そこに同様の「近代人の苦悶」を見出している。そこから郁達夫が「同情」（現在の一般的な「共感」という語意に等しい）という概念で苦悶を乗り越える道筋を示していることを、やはり大正期の青年に大きな思想的影響を与えた阿部次郎の言説と結びつけて論じ、それが郁のみならず、創造社の他の同人も共有した同時代的テーマであったことを示した。そして、彼らが頻繁に用いた「Sentimental」という表現に対し、近代の科学万能主義によって抑圧された日常生活への感受性を再構築する試みを表す概念である、という新しい解釈をし、「沈淪」で描き出した苦悶や同情、「sentimental」を通じ、近代科学万能主義によって抑圧された感情の主体を喚起し、近代人の苦悶の根源にある主客分離の状態を修復し、生命の原始状態に復帰する試みを青年たちに提供しようとしたことこそ、彼の「沈淪イズム」の実体であると論じている。

本論文は、以上の章立てから、大正教養主義の中心にあった旧制高校で得た思想資源こそ、郁達夫が中国で文学創作を通じて「近代人の苦悶」を解剖し超克するための多層的な視点を獲得する道具であったことを結論としている。本論文は、これまでの中国近代文学研究の蓄積の上に新たな、一つの確実な郁達夫像を作ったと言える意欲的な研究

である。文学テキストやその他の文献を豊富に収集し的確に解読することで、当時の日中の社会文化状況を生き生きと浮かび上がらせ、郁達夫という人物およびその文学上のテーマを浮き彫りにしたことは高く評価することができる。

このように、本論文は着実な実証的手法と文化思想状況に対する大胆な解釈を通じて作家の文化接触とその文学における影響を解明した優れた考察であり、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると評価した。